



# 俳壇

## 矢島 渚男 選

隔てなく来るもの癒し泉湧く

【評】泉の本質をとらえた大きく優しい秀句。泉は動物も人間も隔てなく癒してくれる。炎暑の時代、水がますます重要になっていく。鮎を焼く匂ひに暮るる祖母の背ナ

名古屋市 山守 美紀

【評】作者の祖母は鮎を焼くことを仕事にして来られた人なのだろうか。少しかがまった背中を見るのも懐かしく感謝の思い。私も戦時中、父が投網で獲ってきたてくれた鮎で育った。方丈記書かれし跡やかなかな鳴く

京都市 吉田 基子

【評】鴨長明は大地震で荒廃した京都から山中に四畳半ほどの庵に住んで方丈記を書いた。一二二二年のこと。その庵の跡で、蝸を聞いた。露深き草を刈り伏す露の上

久喜市 深沢ふさ江

拾ひ上げた蟬から蟻がこぼれけり  
大府 池田 寿夫  
メンデルスゾーン聞く卓上の白桃と  
横濱市 奥沢 和子  
縁談の後は懇談暑気払ひ  
栃木県 ありのひとし

一生を一職人や残る虫  
香取市 嶋田 武夫

廃船の繫がれし川鮎下る  
相模原市 はやし 央

今日もまた蟬時雨背にリハビリハ  
藤原川内市 末永 芳子

## 宇多喜代子 選

陰もなき家並の先に夏の海

【評】海までの炎天の道。家並は続いているのだが、日陰はない。たぶんお日様が真上にある時間帯だろう。この道を抜けると夏の海がひらけて見えている。

岩国市 藤川美智子

【評】あの部屋、この部屋に灯っていた灯を二つと消してゆく。残っているのは、用のある部屋の灯だけだ。静かな秋の夜の情景である。九十の一人暮らしや百日紅

東大阪市 渡辺美智子

【評】九十歳の一人暮らし。当節では珍しくはないが、やはり元気でなくては生きていくには足りない。百日紅が元気の象徴として咲いている。豊作を語る如く田水沸く

町田市 谷川 治

朴の花淋しく見たり木曾の雨  
神奈川 新井たか志  
風鈴の煩はしき日のありしかな  
東京都 杉中 元敏  
トンカツをシャキと切る音夏の屋  
横濱市 宮内 禎二

ままよとは大人こぼれ赤のまま  
富山市 藤島 光一

ビルの壁鳴かず動かす油蟬  
東京都 伊藤 博之

完売の空也最中よ夏暖簾  
東京都 鈴木 淑枝

## 正木ゆう子 選

暑くって死にそうと子のねたるもの

【評】欲しい物を言わなくても、死にそうと訴えれば、アイスの類いが出て来る場面だろう。それを知って甘える子供と作者の関係性が面白い。品名をほかした下五が上手い。生身魂うつなつくすらも堂に入る

下妻市 神郡 貢

【評】傳く人が側にいて、本人はもう多くを語らず、肯くだけ。その様子が、いかにも奥ゆかしいのである。尊敬の念が、句から滲み出ている。おおよそ涼しくならぬ給柄の団扇かな

稲城市 日原 正彦

【評】アニメ関係の絵ではないかと思いがたうだろう。色鮮やかで、情報があふく話だった、余白の無い団扇。大音響を聞かしてきこえさ。避難所は母校の畳台風来

東海市 斉藤 浩美

駄菓子屋にプールのにほひ溜まりたる  
連田市 千葉 玄能  
焼酎の空瓶に汲む神の水  
対馬市 神宮 斉之

パジャマ着を聞かしくして夜涼み  
陸前高田市 及川カヨ子

ひと夏の経験をした頃の夏  
土浦市 今泉 準一

リユック見て何泊か当つ山仲間  
南房総市 山根 徳一

## 小澤 實 選

熊谷の四方八方雲の峰

【評】熊谷という地名が、よくはたらいっていると思う。気温の高さで名高い地である。その高温が、土地の四方八方に入道雲をそびえさせている。見えない暑さを見せている。大股に歩く他なし炎天下

熊谷市 白井 正

【評】炎天下を歩くには、どうしたらいいか。できるだけ早く歩いて早く目的地に着くしかない。「大股に歩く」のはなかなか賢明である。爪立てて立たなき方の南瓜取る

東京都 松永 京子

【評】庭に二つ南瓜が実った。爪を立てて爪が立たないというところは、それだけ固く実ったということ、食頃を固さで判断しているのだ。白桃をすすする恥ぢらひ空手女子

志木市 谷村 康志

良く売れてリヤカー軽草の市  
東大阪市 梶田 高清  
背高泡立草己が毒もて滅びけり  
名古屋 可知 豊親

捕虫網少年浅瀬渡りゆめ  
武蔵野市 相坂 康

夜干する梅の匂を通りけり  
東京都 望月 清彦

嘶家の物売りの声江戸涼  
川越市 横山由紀子

## 俳句あれこれ 堀田季何 (俳人・歌人) 詩囊を肥やす

今年、一般読者向けに「俳句ミーツ短歌」という本を上梓した。俳句と短歌を様々な視点から比べながら、それぞれについて読者に解ってもらおうと趣旨をまとめた。お陰様で好評である。俳句と短歌の両方を長年やってきたから、俳句も短歌も客観視できたのだと思う。しかし、十年位までは、どちらが本気なんでしょうか、蛇蜂取らずですよ、と言われ、俳壇で歌人扱い、歌壇で俳人扱いされる始末で、高橋睦郎さんに「両方やっていて良いんだよ」と言われるまで、ずっと辛かった。そういう、睦郎さんは、俳句で蛇笏賞、自由詩で詩歌文学館賞を獲り、短歌で逍空賞候補になっていく。思えば、正岡子規も吉岡実も塚本邦雄も寺山修司も、詩型を軽く越境していた。複数の詩型を試みたこと、彼らの詩囊は肥えたに違いない、詩法が乱れたとは終り聞かない。

虫ノ声滋シ歌ヨミナラバ歌ヨマン 正岡子規



題字デザイン・イラスト 福田美蘭